本棚

矢口芳生　著

『農業貿易摩擦論』

本書は著者の40年近くにわたる研究成果を再構成した著作集（全８巻）の第２巻である。おもに1986年と90年刊行の単著に基づいており，対象時期は72年から80年代（８頁）が中心である。

構成は序論で課題と方法を示し，第Ⅰ部では国際的な相互依存関係の下における日米農業摩擦について，第Ⅱ部では日本農業への影響と対応について論じている。結論では80年代までの状況を総括した上で，2006～08年の世界食料危機を73～74年のそれと比較している。

本書の大きな特色は，著者自身も指摘する通り，「食糧戦略」にかかる枠組みを独自に理論化した点である。食糧戦略は，主体が国際政治経済のなかで食糧の生産・流通（貿易）をとおしてインタレストの極大化とコスト・リスクの極小化を図るための体系であり（８頁），その主体と戦略は３類型に整理されている。すなわち国際機関レベルの飢餓解放戦略，国家レベルでは農業大国の輸出戦略と輸入大国の安全保障戦略，各国レベル（あるいは脱国家レベル）では企業の販売戦略と国民の求める需給安定である。

市場をもっぱらの対象とする経済学の分析枠組みでは対処の難しい，大きな構図が示されているといえよう。このなかで国際農業摩擦は食糧戦略の衝突として把握されている。

もう一つの特色は，上記の枠組みに対応した，広範かつ基礎的な視点からの接近である。第Ⅰ部では，米国側の事情を幅広く見渡し（ヘゲモニー再建構想やECなどとの摩擦，双子の赤字，農業不況など），それによって日米間における農業摩擦の性格を明らかにしたうえで，コメ摩擦について論じている。第Ⅱ部では，日本における農産物貿易自由化を受けた農業・農政の変化を捉え，あるべき姿を模索するために，日本の食料供給力，貿易構造，地域経済，個々の農業経営，農業構造改革が網羅されている。

こうした整理が，日本農業のおかれた状況の要約にも役立っている。日本の食料（糧）戦略（賃金財である食料の安価な輸入，国内農業の保護）は工業発展（加工貿易）に積極的役割を果たす位置づけであり，食料安全保障は対米・国際関係を良好にすることではかられたという（49～50頁）。日本や西ドイツによる工業製品の輸出と米国の赤字拡大，それを是正するためのドル安およびマクロ経済政策の国際的協調という西側世界経済システムの危機回避に加えて，米国・ECの農産物過剰生産と輸出補助金という世界農業の悪循環を解消するために，日本の農産物市場開放が求められた（358～360頁）。

このように全体を通じて俯瞰的な視点が際立つ一方，各種の政策文書や当局者の発言を参照した詳細な記述は，現在の情勢を考える上で踏まえるべきところが多く勉強になる。著者が研究対象の現実と向き合い格闘してきた貴重な記録でもある。また本書で示された食糧戦略の理論的枠組みが今日的にどのような意味を持つのか興味深いところであり，今後の展開が期待される。農業の国際分野や，国際的文脈におかれた日本農業に関心のある方には一読をお薦めしたい。なお，ウルグアイラウンド（農業摩擦対策）の決着を踏まえた世界の農政改革は本書に続く第３巻の主題である。

――農林統計出版株式会社　2012年3月発行

定価6,000円（税別）　502頁――

（主席研究員　平澤明彦・ひらさわ　あきひこ**）**

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/